

勇ましい高尚なる生涯

樋野興夫著

いい覚悟で生きるより

どのような境遇にあっても、希望と喜びのために生きる努力を続ける
まじめな生涯こそ、もっとも価値のある生きた証になります。

「勇ましい高尚なる生涯」と聞いてすぐにピンと来る人は多くはないでしょう。

「勇ましい」「高尚」「生涯」と普段あまり使わない言葉の連続です。なんのことだかよくわからない。それがなぜだか、がん哲学外来に来る患者さんはスッと受け入れてくれるのです。

がんになったとき、これまでがんばって生きてきた人生の意味はなんだったのかと、やるせなくつらい思いにとらわれる人は多いようです。そういう人は人生に無常を感じて、ふと心にすきまができる。だから、この言葉を受け入れられるように感じる のでしょう。

この人生の役割とはいったいなんでしょう。

それはどんな状況、苦難にあっても、「にもかかわらずやります」というものだとは私は思っています。自分の人生が自分以外のためにあるように思えること、自らが犠牲になっても心が豊かになるようなこと。その実践こそが、まさしく「勇ましく高尚なる生涯」なのです。

「後世へ遺すべき物は、お金、事業、思想もあるが、誰にでもできる最大遺物とは、勇ましい高尚なる生涯である」

私が尊敬してやまない内村鑑三の言葉です。自然科学者であり、思想家であり、偉大なキリスト者であった内村です。金も書物も何も残せない、そんな自分は無用なのだ、と言う人に対して、内村は『後世への最大遺物』という講演 録の中で、そんなふう言葉が続けています。

この世の中は失望の世の中ではなく、希望の世の中であると信じていることである。そして、この世の中は悲嘆ではなく、歓喜の世の中であるという信念のもと日々研鑽し、その生涯を世の中への贈り物としてこの世を去る——。つまり金や地位や名誉にとらわれず、どのような境遇にあっても善と希望と喜びのために生きる努力を続けるまじめな生涯そのものが「勇ましい高尚なる生涯」であり、もっとも価値のある、後世への贈り物だということです。いかにもキリスト者らしい内村の言葉です。

病床にあっても、体は自由に動かなくても、そして死を前にしてもできること。それは、何かを世の中に贈りたいという思いと、かけがえのない人生を最後までつらぬく小さな努力ではないでしょうか。

自分が生きた証を残したい。切実にそう願う人のために、私はこの「勇ましい高尚なる生涯」という 言葉を選びます。

